

気候系監視速報（2025年（令和7年）1月）

気候系の特徴（2025年1月）

- ・エルニーニョ現象もラニーニャ現象も発生していない平常の状態と見られるが、ラニーニャ現象に近い状態となっている。対流活動は、平年と比べて、北インド洋～インドネシア西部、中米南部で活発、太平洋赤道域の西部～中部、北大西洋熱帯域で不活発だった。
- ・対流活動に対応して、対流圏上層では、インド洋で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。地中海東部～南アジア～北太平洋～北米で波列状の偏差パターンが卓越し、日本の南西で低気圧性循環偏差となった。
- ・500hPa高度では、ヨーロッパ付近～ユーラシア大陸南部～北太平洋で波列状の偏差パターンとなり、日本の南西で負偏差、オホーツク海で正偏差となった。
- ・海面気圧では、アリューシャン低気圧とシベリア高気圧は平年と比べて弱く、冬型の気圧配置は長続きしなかった。
- ・日本の月平均気温は、北日本でかなり高く、東日本で高かった。一方、沖縄・奄美で低かった。月降雪量は、北・東日本日本海側で少なかった。

日本の天候（図1～3、表1）

平均気温：北日本でかなり高く、東日本で高かった。一方、沖縄・奄美で低かった。西日本では平年並だった。

降水量：西日本日本海側でかなり少なく、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美で少なかった。一方、東日本日本海側が多かった。北日本日本海側と北日本太平洋側では平年並だった。

日照時間：北・東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり多く、北日本太平洋側と沖縄・奄美が多かった。

天候経過：冬型の気圧配置が長続きせず、低気圧の影響を受けにくかった。このため、月間日照時間は、北・東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり多く、北日本太平洋側と沖縄・奄美が多かった。1946年の統計開始以降で1月として、月間日照時間は西日本太平洋側で1位、西日本日本海側で1位タイの多照となった。また、月降水量は、西日本日本海側でかなり少なく、東・西日本太平洋側と沖縄・奄美で少なかった。月降雪量は、北・東日本日本海側で少なかった。一方、上旬に冬型の気圧配置や低気圧の影響を受けた東日本日本海側で、月降水量は多かった。月平均気温は、北日本を中心に寒気の影響が弱く、暖かい空気が流れ込んだ時期があり、北日本でかなり高く、東日本で高かった。一方、大陸からの高気圧の張り出しに伴う寒気の影響で、沖縄・奄美で低かった。

世界の天候

- ・世界の月平均気温偏差は $+0.68^{\circ}\text{C}$ （速報値）で、1891年の統計開始以降、2024年を上回り1月として最も高い値となった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約 $0.84^{\circ}\text{C}/100$ 年（速報値）である（図4）。
- ・主な異常天候発生地域は次のとおり（図5）。
 - ロシア西部～地中海東部周辺、ブラジル南部～アルゼンチン中部、オーストラリア南西部で異常高温となった。
 - モンゴル東部～中国中部、インドネシア西部及びその周辺、西シベリア～ロシア北西部、ヨーロッパ中部～西部、米国アラスカ州及びその周辺で異常多雨、中央アジア南部～地中海東部周辺、米国東部～カナダ南西部、ブラジル南部～アルゼンチン中部で異常少雨となった。

海況（図6）

- ・太平洋赤道域の海面水温は、西部で顕著な正偏差、中部で負偏差となった。NINO.3海域の月平均海面水温偏差は -0.2°C 、基準値との差は -0.1°C だった（図7）。

- ・北太平洋では、熱帯域の西部から中緯度帯の広い範囲で顕著な正偏差となった。
- ・南太平洋では、熱帯域の西部で顕著な正偏差、熱帯域の東部で負偏差となった。
- ・インド洋では、南東部で顕著な正偏差、アラビア海から赤道域の中部で顕著な負偏差となった。
- ・北大西洋では、米国東方沖を除き、広い範囲で顕著な正偏差となった。
- ・南大西洋では、熱帯域の広い範囲で顕著な正偏差となった。

熱帯の対流活動と循環

- ・対流活動は、平年と比べて、北インド洋～インドネシア西部、中米南部で活発、太平洋赤道域の西部～中部、北大西洋熱帯域で不活発だった（図8）。
- ・赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、南米～インド洋～インドネシア付近を東進した（図9）。
- ・対流圏上層では、インド洋で南北半球対の高気圧性循環偏差となった（図10）。地中海東部～南アジア～北太平洋～北米で波列状の偏差パターンが卓越し、日本の南西で低気圧性循環偏差となった。
- ・対流圏下層では、インド洋で南北半球対の低気圧性循環偏差、太平洋西部～中部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。
- ・海面気圧は、インド洋熱帯域～インドネシアで負偏差、太平洋熱帯域の広い範囲で正偏差となった。南方振動指数は+0.2だった（図7）。

北半球の循環

- ・500hPa 高度（図11）は、北米東部～北大西洋中緯度で顕著な負偏差となった。ヨーロッパ付近～ユーラシア大陸南部～北太平洋で波列状の偏差パターンとなり、日本の南西で負偏差、オホーツク海で正偏差となった。
- ・200hPa 風速（図12）より、偏西風は平年と比べて北米で強く、北大西洋で南寄りを流れた。亜熱帯ジェット気流はユーラシア大陸で蛇行し、日本付近で南に蛇行した。日本付近では、寒帯前線ジェット気流の南への蛇行は弱かった。
- ・海面気圧（図13）より、アリューシャン低気圧とシベリア高気圧は平年と比べて弱かった。
- ・850hPa 気温（図14）は、ユーラシア大陸北部の広い範囲で正偏差、米国、日本の南西で負偏差となった。
- ・30hPa 高度より、成層圏極渦は平年と比べて強かった。

南半球の循環

- ・500hPa 高度は、高緯度で正偏差、中緯度ではインド洋で負偏差となった。
- ・海面気圧は、インド洋の中緯度で負偏差となった。

帯状平均場

- ・帯状平均した対流圏の東西風は、北緯30度帯、北緯60～70度帯、南緯30度帯で西風偏差となった。北半球の極夜ジェット気流は平年に比べて強かった。
- ・帯状平均した対流圏の気温は、北半球高緯度と南半球中緯度を除き高温偏差となった。北半球高緯度の成層圏で低温偏差となった。

北半球の積雪と海水

- ・衛星観測による北半球の積雪日数は、平年と比べて、米国北東部で多く、ヨーロッパ東部～中央アジア、東アジア西部で少なかった。
- ・北極域の海水面積は、1月としては1979年以降で2番目に少なかった。特に、バレンツ海、オホーツク海、ベーリング海で平年と比べて少なかった（[米国雪氷データセンター](#)）。

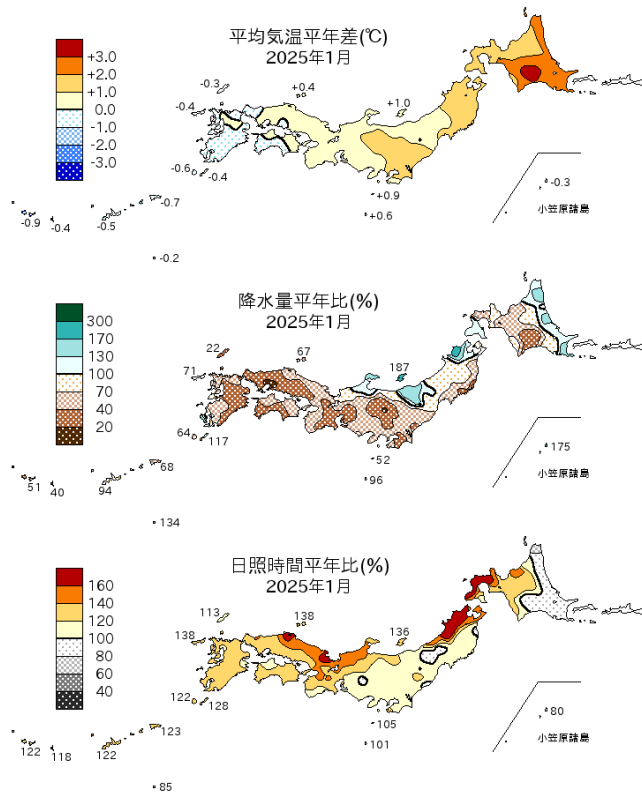


図1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の平年差(比) (2025年1月)
平年値は1991~2020年の平均値。

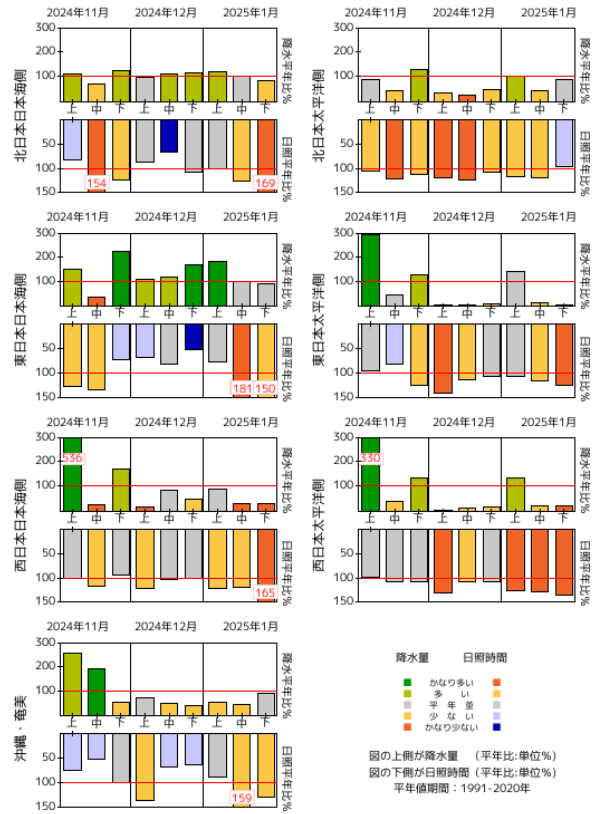


図2 旬降水量及び旬間日照時間地域平均平年比の時系列(2024年11月~2025年1月)
それぞれの上側が降水量(%),下側が日照時間(%).
平年値は1991~2020年の平均値。

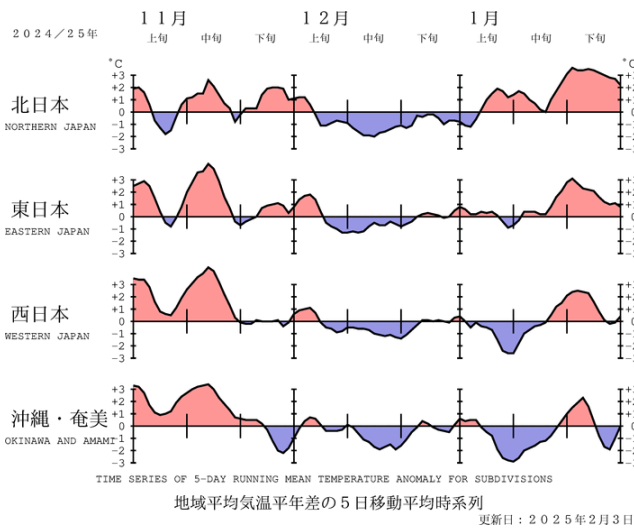


図3 地域平均気温平年差の5日移動平均時系列(2024年11月~2025年1月)
平年値は1991~2020年の平均値。

表1 月平均気温、月降水量、月間日照時間の地域平均平年差(比)(2025年1月)
平年値は1991~2020年の平均値。

地域平均平年差(比)と階級 2025年01月

	気温平年差 °C (階級)	降水量平年比 % (階級)	日照時間平年比 % (階級)
北日本	+1.6 (+)*	87 (0) 日 101 (0) 太 76 (0)	121 (+)* 日 136 (+)* 太 109 (+)
東日本	+0.9 (+)	59 (-) 日 125 (+) 太 42 (-)	120 (+)* 日 139 (+)* 太 115 (+)*
西日本	0.0 (0)	47 (-)* 日 45 (-)* 太 48 (-)	132 (+)* 日 136 (+)* 太 129 (+)*
沖縄・奄美	-0.6 (-)	64 (-)	125 (+)

階級表示

(-):低い(少ない)、(0):平年並、(+):高い(多い)、(0)*は、かなり低い(少ない)、かなり高い(多い)を表す。

地域表示

日:日本海側、太:太平洋側

本文中の北・東・西日本の降水量・日照時間の特徴は、日本海側・太平洋側の階級に基づいて記述している。

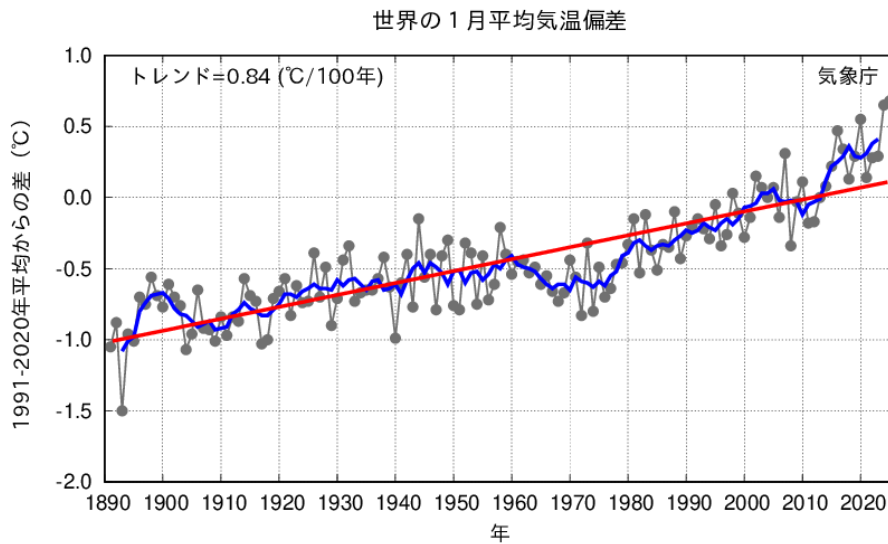


図4 1月の世界の月平均気温偏差の経年変化（1891～2025年：速報値）
 細線（黒）：各年の平均気温の基準値からの偏差、太線（青）：偏差の5年移動平均値、直線（赤）：長期変化傾向。
 基準値は1991～2020年の平均値。

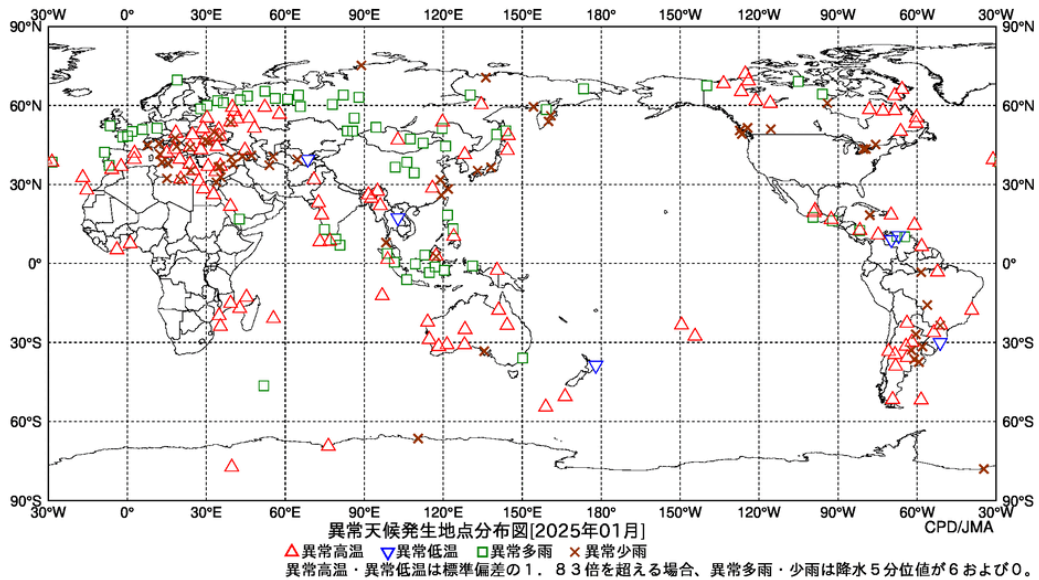


図5 異常天候発生地点分布図（2025年1月）
 △：異常高温 ▽：異常低温 □：異常多雨 ×：異常少雨

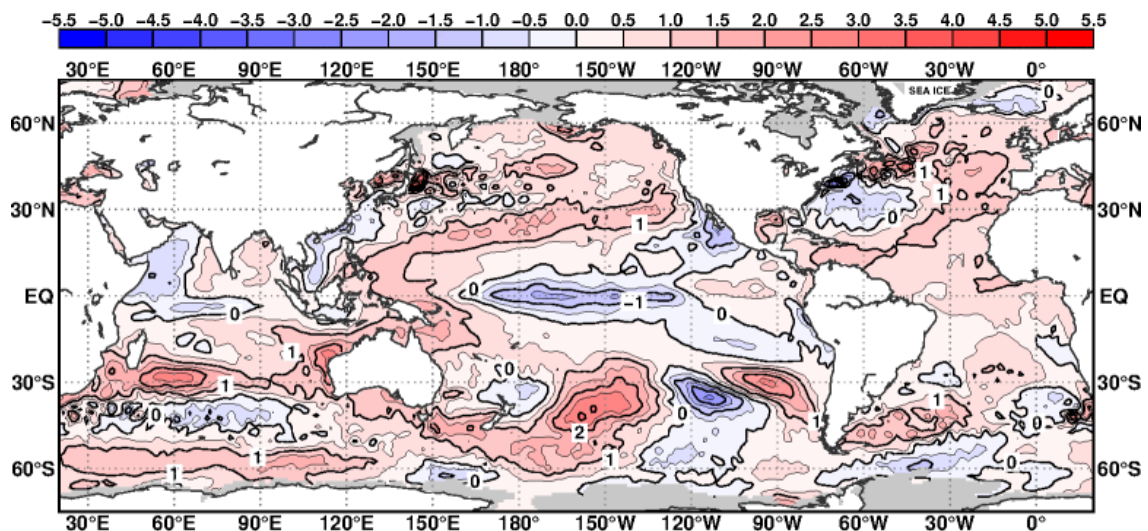


図6 月平均海面水温年差（2025年1月）
 等値線の間隔は0.5°C毎。灰色陰影は海氷域を表す。平年値は1991～2020年の平均値。

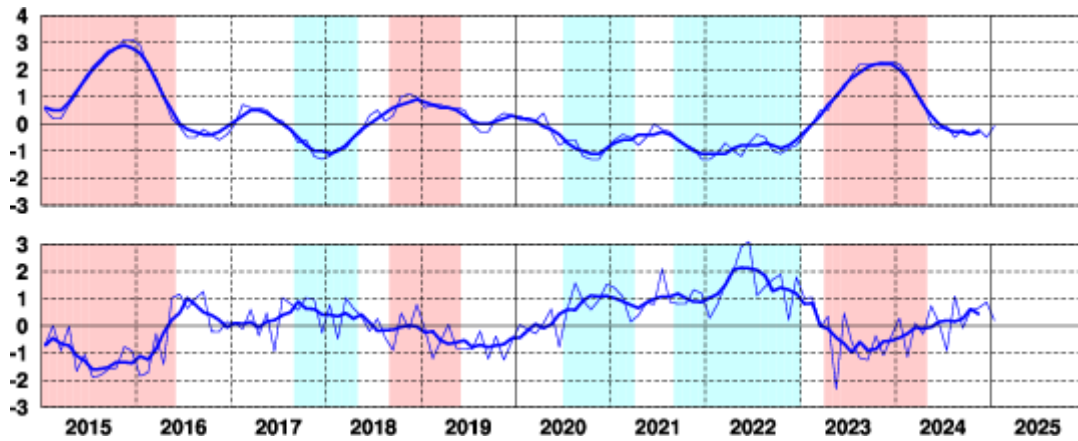


図7 エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差(°C) (上)と南方振動指数(下)の推移
 細線は月平均値、太線は5か月移動平均値を示す(海面水温の基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値、南方振動指数の平均値は1991~2020年の平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

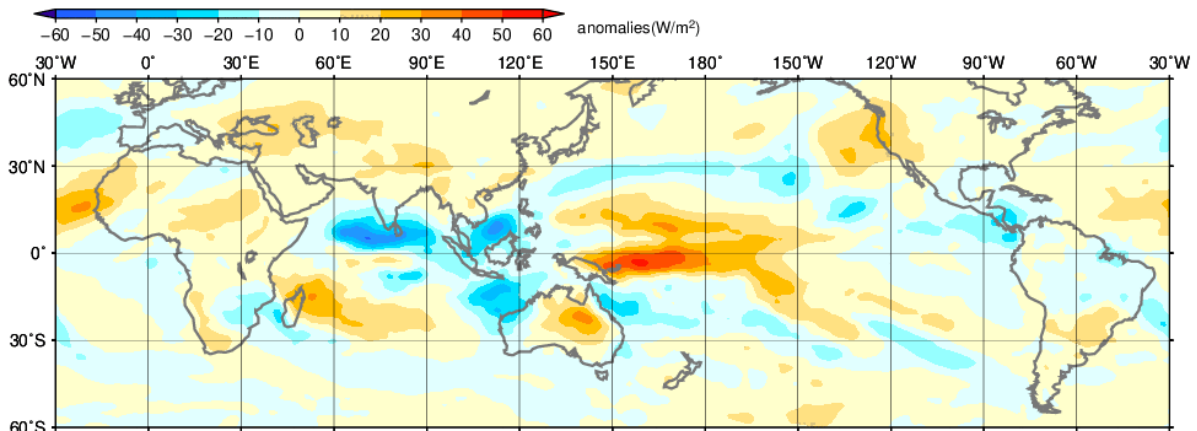


図8 月平均外向き長波放射量(OLR) 年差(2025年1月)
 陰影の間隔は10W/m² 毎。年平均値は1991~2020年の平均値。米国海洋大気庁(NOAA) 気候予測センター(CPC)より提供されたBlended OLRを用いて作成。

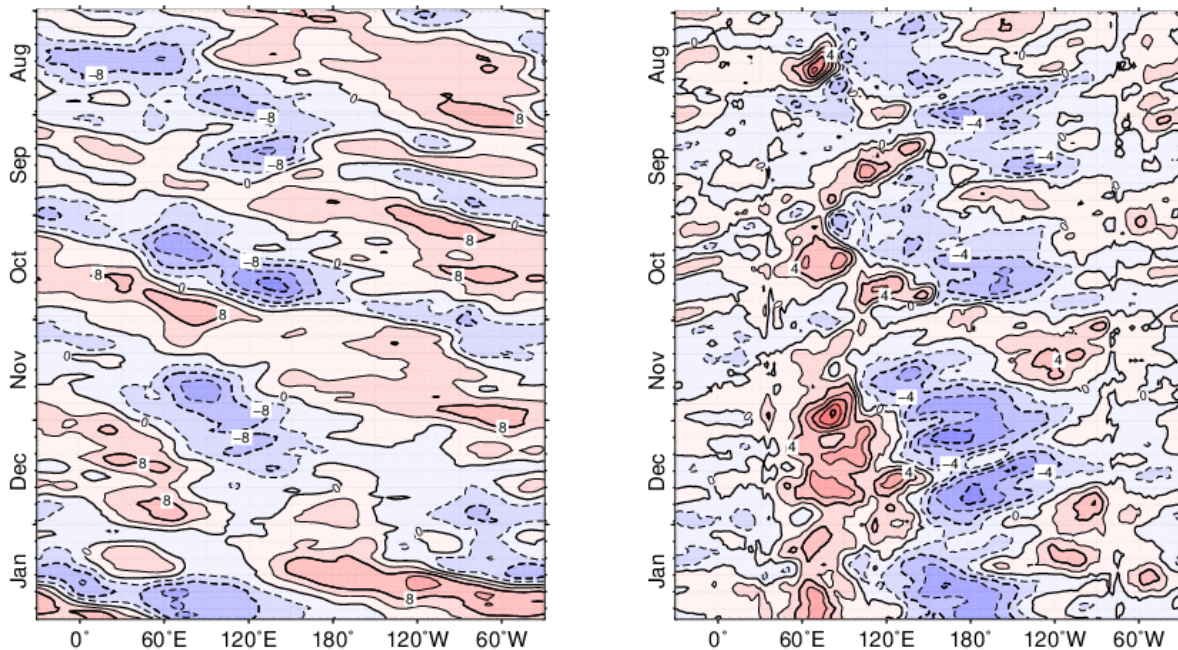


図9 赤道付近(5°N~5°S)の5日移動平均200hPa速度ポテンシャル年差(左)、850hPa東西風年差(右)の時間・経度断面図(2024年8月~2025年1月)
 等値線の間隔は、 $4 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 毎(左)、2m/s 毎(右)。年平均値は1991~2020年の平均値。

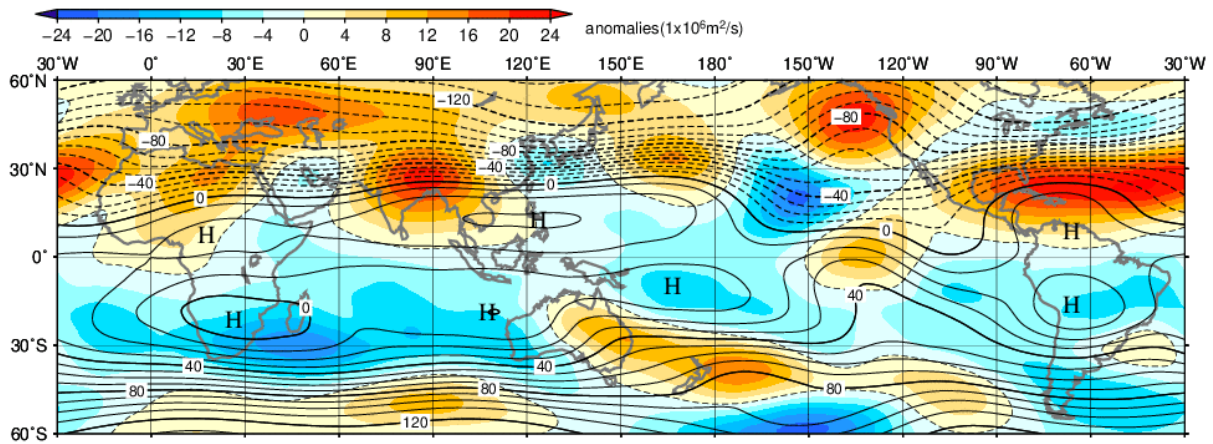


図10 月平均200hPa流線関数・平年差(2025年1月)
等値線の間隔は $10 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

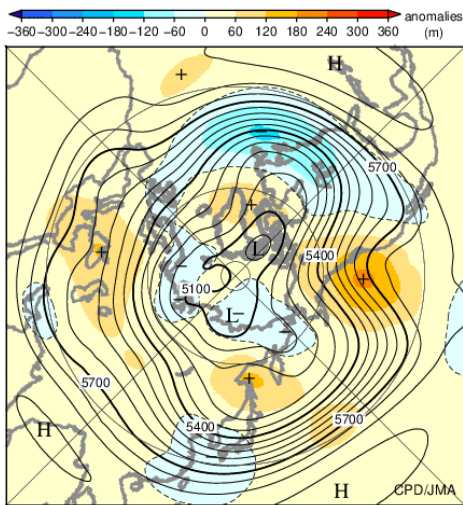


図11 北半球月平均500hPa高度・平年差(2025年1月)
等値線の間隔は60m毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

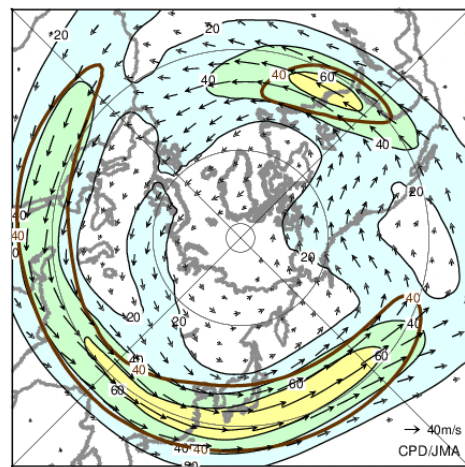


図12 北半球月平均200hPa風速・風ベクトル(2025年1月)
等値線の間隔は20m/s毎。平年の40m/s毎の等値線を茶色で表す。平年値は1991~2020年の平均値。

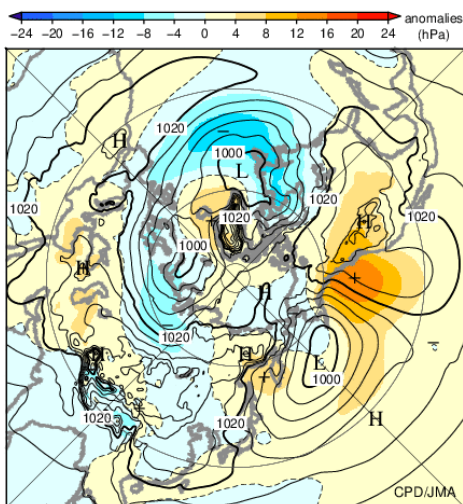


図13 北半球月平均海面気圧・平年差(2025年1月)
等値線の間隔は4hPa毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

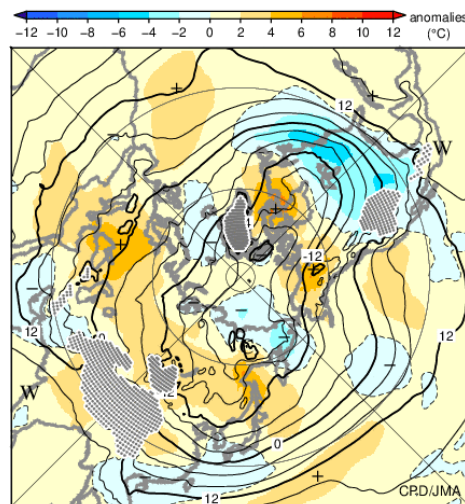


図14 北半球月平均850hPa気温・平年差(2025年1月)
等値線の間隔は4°C毎。陰影は平年差。平年値は1991~2020年の平均値。

気候系に関する詳細な情報は、気象庁ホームページ内「地球環境・気候」の「気候情報(異常気象、最近の天候、地球温暖化等に関する情報)」の各項目に掲載しています。気象庁ホームページ内の「地球環境・気候」のURLは次の通りです。<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/menu/index.html>

本件に関する問い合わせ先：気象庁 大気海洋部 気候情報課



【地球環境・気候】